

日本線虫学会ニュース

Japan Nematology News

目次

◆巻頭言（岩堀英晶）	1
◆事務局から	
2017～2018 年度日本線虫学会会長選挙及び評議員選挙について	2
2017 年度会費納入のお願い	3
第 24 回日本線虫学会大会報告	3
◆2017 年度日本線虫学会大会（第 25 回大会）の開催予告（大会事務局）	4
◆記事	
第 17 回国際土壌動物学会議を開催・参加して（岡田浩明）	4
第 32 回ヨーロッパ線虫学会に参加して（大田守浩）	6
第 32 回ヨーロッパ線虫学会に参加して（北上雄大）	7
Pine Wilt Disease Conference 2016 参加報告（保谷剛志）	9

[巻頭言]

岩堀英晶（龍谷大農）

先日、さる大きな学術賞を受賞された方のご講演を聞かせていただく機会がありました（I 先生としておきます）。ご自身は伝統的な手法である形態的手法で分類学をされてこられました。I 先生の主催する研究グループでは、当時まだ黎明期にあったタンパク質や DNA を用いた分子生物学を初めとする分析的な生物学を発展させ、生物学の諸情報を結びつけて多様な生物間の相互関係を統合的に理解しようと努めてこられました。I 先生は生物が「生きている」とは、「生物の多様性」とはどういうことか

を明らかにしたいという、哲学的な思索も織り交ぜられた研究姿勢を貫いてこられ、高く評価されています。

I 先生のご講演の前にお二方の若手研究者の方々が講演をされました。最初の方は、これまで同種とされてきた種の八重山個体群と小笠原個体群が同種かどうかを明らかにすることを目的に、DNA 塩基配列の差異と交配試験による雑種作成を行って、遺伝的距離と雑種形成能力は相関性があることを示しておられました。もう一方は、ゼニゴケの器官分化に関する遺伝子解析をされている方で、最新の技術である RNAseq やゲノム編集などにより、ゼニゴケには被子植物の形態形成で用いられている遺伝子と

相同なものを既に持っている、すなわち、植物が陸上に進出した頃から既にこれらの遺伝子が獲得されていたことを示唆した研究でした。

I 先生はこれらの講演を聞かれた後で、この二人の研究が非常に手堅く洗練された手法・研究方針でなされたものであることを称賛しつつ、「それであなた方の研究対象の生物が『どのように生きている』かが分かりましたか?」「研究手法は優れていますが、その方法は楽しいですか? (あくまでやさしく)」と問われていました (I 先生の正確なご発言ではありません。私の印象がかなり混ざっています)。お二人の若手研究者の研究内容は、おそらくはそれぞれの学会で高く評価されたものであるでしょうし、私自身も「クリアな結果を出されたものだなあ」と感心して聞いていただけに、I 先生の言葉にははっとするものがありました。

おそらく昨今の多くの研究者はこのようにきれいな結果を求められ、それに応えた者は高く評価されるというシステムに慣れ切っているのではないかと思います。「とりあえず結果を」「とりあえず成果を」と、ノルマや外部資金獲得のために息せき切ってデータを取っていることと思います。研究を続ける上で外部の要求に応えること自体は悪いことではないと思います。しかし、私たちの扱っている研究対象、すなわち線虫が「生きているもの」ということを忘れがちになってしまっているのではないのでしょうか。単なる研究材料、単なる商売道具として扱われていないのでしょうか。無論そう割り切っている研究者の方もおられるかもしれませんが。しかし、多くの方が、線虫を小さいながらも一生懸命に生を営んでいる愛すべき存在として感じて研究を始めたのが原点であるのではないかと思います。

私は学生によく「線虫でも種類によって生きざまが違う」とか、「研究者は研究対象を愛しています」とか偉そうに嘯いているのですが、やはり研究への入り口は、線虫であれその他の生き物であれ、「生きている」という不思議を感じるころから始まるものではないかと思います。もし、線虫を生き物として見られなくなりかけている方がおられましたら、もう一度顕微鏡の視野で健気に動く線虫を「生き物」として眺めて見られてはいかがでしょう。きっとその先に新しい展開が見えてくるかもしれません。

[事務局から]

2017～2018 年度日本線虫学会会長選挙及び評議員選挙について

2017年3月末をもって、日本線虫学会の現役員の任期が満了となります。会則第12条に従って、2017～2016年度の会長選挙及び評議員選挙を実施します。会長及び評議員は本学会の運営に責任を持ち、その発展を左右しますので、その選出にはより多くの会員の意見が反映されることが重要です。選挙人名簿に記載の投票上の注意事項をご確認の上、下記締め切り日までにご投票をお願いいたします。

会長は、選挙人名簿中の正会員から1名を選び、「会長選挙用の投票用紙」にその氏名を正確に記入してください。評議員は、選挙人名簿中の正会員から10名以内を選び、「評議員選挙用の投票用紙」にその氏名を正確に記入してください。

会長選挙用の投票用紙及び評議員選挙用の投票用紙は、内封筒（無記名とする）と一緒に入れて封をし、返送用封筒（投票者の住所及び氏名を必ず記入する）に入れて、

学会事務局内選挙管理委員会宛に郵送してください。恐れ入りますが、返送用封筒の郵送に要する費用は、会員各位のご負担とさせていただきます。

選挙人名簿、会長選挙用投票用紙、評議員選挙用投票用紙、内封筒及び返送用封筒（宛名印刷済み）は、本ニュースに同封しております。投票の締め切りは、2017年3月6日（月）必着とします。本選挙に係る学会規約は、選挙人名簿に記載されています。

2017 年度会費納入のお願い

同封の会費納入依頼文書をご確認の上、2017 年度会費 ¥4,000（正会員）を郵便振替で納入してください。本学会の会費は会則第7条で前納と定められておりますので、2017年3月31日までに納入してください。2016 年度以前の未納の会費がお有りの方は、併せて納入をお願いいたします。本学会は会員の皆様の会費により運営されており、会費の滞納は学会運営に支障を来します。皆様のご協力をお願いいたします。なお、正会員が学生会費 ¥2,000 の適用を受けるためには、大学等の在籍証明（郵便振替用紙の通信欄への指導教員の署名・捺印でも可）が必要です。また、退会を希望される方は 事務局まで必ずご連絡ください。

第 24 回日本線虫学会大会報告

2016 年 9 月 14 日～16 日に東京農工大学小金井キャンパス（東京都小金井市）において、第 24 回定期大会が開催されました。大会参加者は 106 名でした。一般講演の口頭発表は 34 題、ポスター発表は 15 題でした。シンポジウム「農工大発植物保護最前線」では 4 題の講演がありました。

1. 評議員会報告

2016 年 9 月 14 日に東京農工大学小金井キャンパス BASE 棟 3 階会議室で評議員会が開催されました。概要は以下のとおりです。

2015 年度の会務（定期大会・総会・評議員会及び編集委員会の開催、学会誌及びニュースレターの発行並びに日本線虫学会 20 周年記念事業「線虫防除全国アンケート」のとりまとめ結果の学会誌第 45 巻第 1 号への掲載）、会計決算及び会計監査結果が報告され、評議を経て承認されました。

2016 年度の事業計画（定期大会・総会・評議員会及び編集委員会の開催、学会誌及びニュースレターの発行、会長選挙並びに評議員選挙）及び予算案が説明され、評議を経て承認されました。その他、Korea-Japan joint meeting の開催に向けて準備を進めることが承認されました。

2. 編集委員会報告

2016 年 9 月 14 日に東京農工大学小金井キャンパス BASE 棟 3 階会議室で編集委員会が開催され、学会誌第 46 巻の編集状況及び投稿原稿の審査状況が報告されました。また、学会誌編集体制を強化するための具体案及び投稿規定の改定について議論がなされました。

3. 総会報告

2016 年 9 月 14 日に東京農工大学小金井キャンパス BASE 棟 1 階講義室で総会が開催され、2015 年度の会務報告、会計報告及び会計監査結果並びに 2016 年度の事業計画案及び予算案が承認されました。

評議員会、編集委員会及び総会の各議事要旨は、学会誌第 46 巻第 2 号の会報に掲載されます。

[2017 年度日本線虫学会大会（第 25 回大会）の開催予告]

大会事務局

2017 年度日本線虫学会大会は、第 18 回大会以来 7 年ぶりに札幌市で開催します。会場は JR 札幌駅および地下鉄大通駅から徒歩 10 分程度の交通便利な、道庁や北大植物園などにも近い、北海道立道民活動センター（愛称：かでの 2・7）にて開催いたします。期間は 9 月 20 日（水）～22 日（金）を予定しております。次回の学会ニュース 71 号（5 月発行予定）にて、より詳細な情報を連絡させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

1. 大会事務局

〒062-8555

北海道札幌市豊平区羊ヶ丘 1 番地
農研機構 北海道農業研究センター
生産環境研究領域 線虫害グループ
第 25 回日本線虫学会大会事務局

（代表 奈良部 孝）

電話: 011-857-9247

Email: narabu*affrc.go.jp

運営委員: 奈良部 孝・串田篤彦・伊藤賢治・
相場 聡

2. 日程

◇2017 年 9 月 20 日（水）

評議員・編集委員会、総会、一般講演、懇親会

◇2016 年 9 月 21 日（木）

一般講演、特別シンポジウム（内容未定）、
ポスターセッション

◇2016 年 9 月 22 日（金）

一般講演（午前中で終了予定、演題数による）

3. 会場

北海道立道民活動センター「かでの 2・7」
大会議室（札幌市中央区北 2 条西 7 丁目）
<http://homepage.kaderu27.or.jp/>

[記 事]

◇ 第 17 回国際土壤動物学会議を開催・参加して ◇

岡田浩明（農研機構・中央農研）

8 月 22-26 日に奈良春日野国際フォーラム 薨（いらか）で、アジア地域で最初となる第 17 回国際土壤動物学会議（第 14 回国際無翅昆虫学会議を同時に開催）が開催され、31 カ国から、日本人 60 名を含む 167 名が参加しました。私はこの会議に開催事務局のメンバー及び発表者として参加しました。現在でも公開シンポジウムの内容などを下記の URL で見ることができます（2016 年 12 月の時点）。

http://soilzoology.jp/icsz_ica2016_jp/

国際土壤動物学会議の方では、1) 世界的気候変動下での土壤生物多様性、2) 分類学と土壤動物の多様性、3) 土壤動物の生態学とその生態系機能、4) 土壤生物多様性の保全—特にアジアとオセアニア地域について、の 4 つのセッションが行われました。また最終日には「土壤動物学と未来の地球」とのテーマで一般公開のシンポジウムも開催されました。

国際学会の開催準備というと、私にとっては 2 年前の日韓シンポ以来ですが、今回は全世界から研究者が参加するという一方で、その準備の大変さは 1 ケタ上でした。私は主に会場係を任されたのですが、会場設営の段取り、機材の手配、当日の会場スタッフの配置からランチボックスの提供ま



受付デスクの様子。旅行会社から3名が出てくれましたが、大会事務局の方でも登録者受付、講演ファイルの受付、記念グッズ配布、会計担当など常時4、5人が詰めました。私は写真中央近くにいます。

で、細々した作業が多々あり、3月に行った会場の下見から8月の開催直前までに事務局のメンバーとやり取りしたメールは534通に達しました。正直、こんなに大変だとは思いませんでした。そもそも土壤動物学の分野では自然環境で学術研究をしている人が多く、線虫学会と異なり農薬メーカーさんなどからの資金援助が受けにくいのです。今回の会議では幸い万博記念事業団などからの資金援助を受け、旅行業者に会場運営などを任せることができたものの、200人に満たない小規模の学会だったので手作り感満載でした。多くの準備を自分たちで、しかもぶっつけ本番に近い状態でやらなければならないハメになりました。また、線虫学関連の研究者の参加が少なかったのも残念でした。私は昨年の初め、国際線虫学連合にこの会議の情報を流しましたが、各国の線虫学会に十分伝わらなかったようです。数少ない線虫学研究の参加者で日本線虫学会にもなじみが深い米国のエドさん（米国ルイジアナ州立大の Edward C.

McGawley 博士）から「各国の線虫学会に直接連絡しないとダメだよ」といわれましたが後の祭りでした。

私は湿田の土壤線虫多様性に関してポスターで（次の *Nematological Research* に掲載予定）、有機栽培リンゴ園を特徴づける土壤動物相について口頭で発表しました。先に書いたように線虫学関連の研究者が少なく、さみしい思いをするのではないかと心配しましたが、ポスターについては幸いベトナム人の女性研究者などが興味を持ってくれ、盛んに質問をしてくれました。口頭発表の方でも内外の研究者から質問の手が上がり、面目を保つことができました（?）

国際会議自体については正直、苦勞した割には報われなかったという思いがありますが、不幸中の幸い（?）もありました。エクスカージョンで私が希望した「伊賀忍者体験コース」が10名に満たない参加者のためにあっけなく取りやめになりました。そこで、天理市にある種苗会社を訪ねることにしました。現在行っているネコブセンチュウの寄主特性評価試験で使用している食用ホオズキの種子を販売している会社です。この際ホオズキについていろいろ情報を教えてもらおうと考えてのことでした。これが自分にとっては予想以上の収穫で、様々な情報が得られた上、栽培農家さんの圃場にもお邪魔してお話を伺うこともできました。自分の研究課題にとっても有益な情報が得られました。

このような顛末で、私にとってはあまり収穫があったとは言えない国際会議でしたが、日本の土壤動物研究の若手にとっては良い機会だったようです。つまり、海外の研究者と直接交流することはもちろん、アジアの土壤動物学研究のネットワーク作りの端緒にもなったのです。



私の講演の様子。靴を脱ぎ、能舞台に上がって行いました。

線虫学会でも若手は積極的に海外の学会に参加したり留学したりしていて、この点土壤動物学会と同じです。ですが、今回の国際線虫学会の招致が実現しなかったのを見ると、土壤動物学会との違いがあるように思います。1 つは、普段から海外の研究者と連絡を取りあっている会員の多少、もう 1 つは、開催を強力に推進しようとするリーダーの存在です。普段、自分の研究だけ考えれば、国際学会をわざわざ日本に招致する必要は無いのかもしれませんが、自分の仕事を世界にアピールしたければ、海外で行われる学会に参加し、国際誌に論文を投稿すればいいのですから。でもまあ、舌足らずの英語を使ってでも、同じような興味を持つ外国人と一緒にお酒を飲みながら時を過ごすのも、たまにはいいじゃないですか。彼らも、日本人や日本の文化には興味を持っていると思います。線虫学会であれば、農薬メーカーさんなどからの支援を受けて資金的に（結果として我々の労力的にもっと余裕を持って開催できると思います。日本線虫学会の評議委員の半数が賛成しない中で無理矢理国際学会を招致しようというつもりはありません。4 年前から始まった日韓の、あるいはアジアでのシンポを小さくても続けていけば、国際学会開催のためのノウハウも蓄積されるでしょ

う。将来線虫学会でも、大きな国際学会を招致しようとする雰囲気が出てくるかもしれません。その時を待つとしましょう（自分の引退後？）

◇ 第 32 回ヨーロッパ線虫学会に参加して ◇ 大田守浩・鈴木れいら（熊本大学）

初めまして、熊本大学 M1 の大田守浩と申します。8 月 28 日から 9 月 1 日までポルトガルのブラガにて開催された、32nd ESN に参加してきましたのでご報告させていただきます。

今回熊本大学からは、澤先生、Allen Yi-Lun Tsai さん、鈴木れいらさんと私を含めた 4 人で参加してきました。全体としてはやはりヨーロッパからの参加者が多く、日本からは私たちを含めても約 400 人中 15 人ほどでした。鈴木さんと私は初めての国際学会という事もあり、不安な事が多かったのですが、英語が上達できる絶好の機会、と意気込んで臨みました。学会では、口頭 152 題、ポスター 191 題、計 343 題の発表が行われましたが、私たちの研究室からは、澤先生と Allen さんが口頭、鈴木さんと私がポスター発表を行いました。私はサツマイモネコブセンチュウに対する誘引物質の探索、という演題で発表したのですが、質問に来て頂いた外国の方と英語で上手くコミュニケーションを取ることが出来ず、もどかしい思いをしました。周りは皆英語で流暢にディスカッションをしており、もっと英語の勉強を頑張らねば、と強く思いました。ポスターセッション以外の時間では、他の方々の発表を聞いて回りましたが、初めて学ぶことが多く、自分の勉強不足を痛感すると同時に、とても良い刺激にもなり

ました。その中でも、特に驚いたのが線虫の分子生物学的な研究で著名な Williamson 博士の発表です。その内容がなんと、私の研究テーマとほとんど同じで、さらに得られたデータも似たようなものだったのです。この発表にはかなりの衝撃を受け、研究は競争であるという事を初めて意識した瞬間でした。今すぐにも帰国して実験をしなければと焦りましたが、一旦落ち着いて日本に帰ってから考えることにしました。発表以外では、サッカー大会や学会ツアーに参加して楽しみました。サッカー大会では、使っている線虫種ごとにチームを分けて試合をしたのですが、ヨーロッパの方々のサッカーの上手さにはかなり驚きました。またツアーでは、ブラガのギマンライスという都市に案内して頂いたのですが、ギマンライスはポルトガルの発祥地とも言われており、旧市街であるギマンライスの歴史地区が世界遺産になっています。入り口には、AQUI NASCEU PORTUGAL (ポルトガルここに誕生す) と書いてあり、数多くの歴史的な建築物を見ることができました。それらの中でも特に、ポルトガル初代国王が住んでいたとされるギマンライス城からは、ブルガの街並みを一望することができ、とても印象に残っています。最終日の夜には、国際学会の醍醐味でもあるディナーパーティーがあり、お酒を交えながら美味しい料理をお腹いっぱい頂きました。ディナーの後には各賞の授賞式があり、最後はダンスパーティーで締めて盛況のうちに全日程を終えました。

今回、このように初めて国際学会に参加して、数々の貴重な体験をさせて頂くことができ、また今後の研究を進めていく上でのモチベーションを高める事もできました。帰国後は僕も負けまいと、目の色を変えて

実験に取り組んでいます。この経験を糧にして、今後とも日々頑張っていきたいと思っています。



ディナーパーティーにて

◇ 第32回ヨーロッパ線虫学会に参加して ◇ 北上雄大 (三重大学)

はじめまして、三重大学博士前期課程 2 年の北上雄大と申します。所属は森林微生物学研究室というところで、主に菌根菌を扱っている部屋ですが、私だけ線虫を扱っております。指導教官である松田陽介先生は菌根菌の群集生態をメインでやっておりますので、群集解析など教えてもらい、線虫群集について調べております。そんな私ですが、ポルトガルのブラガで行われた第 32 回ヨーロッパ線虫学会 (8 月 29 日～9 月 1 日) に参加しましたので、それについての参加報告をいたします。

ブラガまでは成田からイスタンブール経由でポルト空港に向かい、そこからバスで移動と、約 1 日かけての移動となりました。参加人数は 300 人強で、日本からは私を含め 9 人が参加しておりました。今回は英語で初めての口頭発表ということで、大会中はウロウロと落ち着きのないうつろい

ていました。大会中はセッションごとの発表に移る前に、プレ講演？が大部屋で行われ、線虫に限らず、それに関わる微生物や作物の相互関係の講演を聴く機会が設けられました。その後、発表は3つの部屋で並行して行われ、基礎から応用まで幅広い分野の発表が行われていました（分類や海産線虫の話も豊富でした）。私は生態や分類のセッションの発表を聴くことが多かったのですが、熱帯林、北欧の樹木園、海藻やキノコなど様々な生態系に生息する線虫の話の聴き、どれも興味をそそられる内容でした。特に海藻にいる線虫で、1000 kmに及ぶ範囲の調査から、ある線虫種がどこにでも分布していたという話で、どうやって分散しているのか興味深かったです。詳しい分散の仕方はまだわからないようでしたが、「魚のウロコについて移動しているのか？」というような質問もあり今後の展開が楽しみでした。これに関して、森林総合研究所の神崎菜摘さんからマナティの体表には独自の線虫コミュニティができていると教えてもらい、なかなか衝撃的でした。

今回、自分は「海岸クロマツ林の土壌線虫群集構造について」という内容で発表を行いました。発表はなんとかできたという感触でしたが、その後の質問を聞き取ることが難しくスムーズなディスカッションとはいきませんでした。（また、同じ時間に *Pristionchus pacificus* の研究で著名な Ralf J. Sommer さんの発表があったことから大半の人はそっちに流れていったようでした）。発表以外では、大会中の催しの一つとして各分野対抗のミニサッカートーナメントが行われ、参加者の交流の場が上手く設けられていました。ちなみに試合では、同チームだった宮崎大の田中龍聖さんが開始早々ヘディングゴールを決めていました（しかしその後は本場サッカーレベルに圧倒される展開となりました…）。3日目にはエクスカッションが行われ、お城コースとワインコースに分かれておりましたが、ほとんどがワインの方に参加し、自分が選んだお城は小規模な団体行動となりました。あまり時間がなかったのか忙しい移動となりゆっくり散策とはいきませんでした。ブラガ



集合写真（大学の中庭で）

の街並みはきれいでした。共に行動していた東大の田中克さんはドイツの方に飲みに誘われ(連れられ?)、意気投合されていました。さて、国際学会の醍醐味である他研究者との交流ですが、これはなかなか苦労しました。研究テーマの話になり分野が異なったりすると、その理解が難しく話を弾ませることができないということが度々あり、自分の専門外の知識や英語で自分の研究を伝えるという力のなさを痛感しました。しかし、少ないながらも Gent 大学の学生やポスドクの方と話をすることができ、今後の自分の進路や研究を考えるための機会となりました。今回の大会は研究を続けるうえで良い刺激となり今後の展望など少しはっきりしたように思えます。また、もしこのような国際学会に参加する機会があれば、今度は他研究者に印象を与えることができるような成果を発表したいと強く思いました。

◇ Pine Wilt Disease Conference 2016 参加報告 ◇

保谷剛志(京大院農)

京都大学農学研究科、修士2回の保谷剛志です。8月29日から9月2日にかけて、韓国、ソウルの Seoul Olympic Parktel で行われた Pine Wilt Disease Conference 2016 に参加してまいりましたので、ここで参加報告をさせていただきます。そもそも、この Pine Wilt Disease Conference は IUFRO (International Union of Forest Research Organizations) の1セッションとして開催されており、今回開催は2013年以来3年ぶりの開催でした。マツ材線虫病(以下マツ枯れ)に関する様々なテーマの発表が5つ

のセッション(4つの口頭発表セッションとポスターセッション)に分かれて行われました。

私は国際学会に参加するのが初めてで、さらに海外に行くのも何年か振りで、パスポートを取るところから学会準備が始まり、それから初めて英語のポスターを作るなど慣れないことばかりで大変でした。

学会には様々な国の研究者が参加していましたが、やはり中国、日本、ポルトガルそして韓国といった、マツ枯れの被害の大きな国々の研究者の方々がほとんどでした。特に開催国の韓国の研究者の方がとても多かったです。マツ枯れに関する様々な講演がありましたが、日程的にヨーロッパ線虫学会と重なってしまったこともあってか、マツノザイセンチュウについての研究はあまり多くありませんでした。むしろ樹木生理、樹木病理、マツノザイセンチュウの共生細菌、マツ枯れの防除法、特にカビを用いた生物的防除、生態系へのマツ枯れの影響、*Monochamus* 属をはじめとしたカミキリムシの研究などが多かったです。その分、全然わからないことも多かったです。線虫学会とは全く雰囲気の違いの研究に触れることができとても新鮮で、刺激的でした。

開催国である韓国の研究者の方々が多かったことは先に触れましたが、「韓国」という国はマツ枯れの研究に対して並々ならぬ情熱があるということを初めて知りました。今回の大会の開会式には日本の林野庁長官にあたる人(多分)が登壇し、韓国民は皆マツが大好きで、韓国内で発生しているマツ枯れは大きな課題であること、国としても今回の大会の開催は非常にありがたく大会によるマツ枯れ研究の発展に非常に期待していること、などを述べておられました。このことは街中の色々な所にマツが植えら

れているのが目に着いたことや、学会における諸々の費用（学会参加費、会食費、エクスカージョン費等）がスポンサーのおかげで無料であったことから感じ取ることができました。

開会式の後に Key note speech と称したシンポジウムが行われ、各国のマツ枯れの現状とマツ枯れ研究の取り組みの一端を知ることができました。韓国では国策としてマツ枯れの防除に取り組んでいるらしく、マツ枯れの様々な防除の取り組みや新しい防除法についての研究のお話でした。中国の研究チームは *Monochamus* 属とは異なるカミキリからマツノザイセンチュウが検出されたなどとてもインパクトの大きなお話をしておられました。他にもスペイン、ポルトガル、日本などマツ枯れ被害国のマツ枯れの概要などを聞きました。

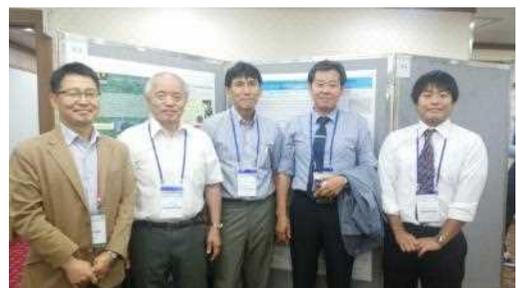
発表においては、ポスターも含めると多岐の領域にわたる様々な研究の発表が行われ、改めてマツ枯れ研究の奥深さ、幅広さ、難しさと面白さを感じました。私自身の発表はポスター発表でした。拙い英語にも関わらず発表を聞いて下さった方々には感謝しています。韓国人の方の中には普通に日本語で質問して下さった人もいて助かりました。

フィールドトリップと称したエクスカージョンにも参加してまいりました。今回は韓国でマツ枯れの被害の著しい地域の実地のマツ枯れ防除の見学と、韓国国立樹木園（Korea National Arboretum）の見学をしました。実際の防除見学では樹幹注入や薬剤の噴霧などを見学することができました。韓国国立樹木園では、様々な植物や、昆虫標本などを見ることができました。この時、二井先生をはじめとした各国のマツ枯れ研究の偉い方々が集団の最前列で興味深そう

に展示を見ておられました。私は英語もあまりわからず適当にみているだけでしたが、先をどんどん進む大先輩方はいつまでも好奇心を失っていないくてすごいな、と感じました。

今回の反省としてはあまり英語でコミュニケーションをとるということができなかったという点です。韓国は日本人にとっても優しい国で、韓国人の研究者の方々には日本語がばっちりという人もたくさんいたのもありますが、もっと積極的に、「拙い英語でも話してみよう」という心意気も足りなかった気がします。

初めての国際学会は緊張したし、準備は大変ではあったけど、様々なマツ枯れに関する研究に触れることができ、先ほども書いたように改めてマツ枯れ研究の奥深さ、幅広さ、難しさと面白さを感じることができました。また、国際学会の空気は独特かつとても新鮮で、英語での発表の中身は雰囲気しかわからなくてもとても楽しかったです。総じて有意義な経験になったと思っています。



ポスター発表後に二井先生、森林総研の中村さん、韓国の研究者の方々と撮って頂いた写真。（私は一番右）

[編集後記]

◆先日、母校（高校）に出前講義に行く機会がありました。研究紹介をして欲しいとのことでしたので、マツ枯れの概要を紹介しつつマツノザイセンチュウが菌糸に口針を突き刺して内容物を摂食する様子をとらえた動画（撮影 by 田中克氏）を見せてみたところ、それまで全員一様に真面目な顔をして話を聞いていた高校2年生達が、うっかわって多様な反応を見せ始めました。百聞は一見に如かず。やはりビジュアルの力ってすごいなあと改めて感じ入りました。あの子たちの誰かひとりでも将来の線虫仲間に加わってくれるといいなあ…。ちなみに男子生徒の大半の感想が「気持ち悪い」だったのに対し、女子生徒からは「かわいい」との声もちらほら。線虫学会の会場が女性で埋まる日も近いかもしれません。

（竹内 祐子）

◆線虫ニュースの編集に携わってはや1年が経過しようとしています。本号はとりわけ国際色豊かな記事が多く、原稿チェック中もついつい内容の方へ意識が向いてしまうほど興味深い内容ばかりでした。執筆者の皆さま、ありがとうございました。話は変わりますが、線虫の微妙な特徴を伝えるのは難しいものだなあと改めて感じる経験をしました。とある農業関係者の方がネコブセンチュウの見分け方を〜と訪ねてこられた際、「えーっと、バランスの良い体型している美人系の（線虫）がそうです…」と答えて相手をぼかんとさせてしまいました。案の定、慌てて資料やらなんやらを引っ張り出して説明する羽目に。分かり易く教えられるよう努力しなければ、と反省するばかりです。

（村田 岳）

2017年1月20日

日本線虫学会

ニュース編集小委員会発行

編集責任者 竹内 祐子

（ニュース編集小委員会）

京都大学大学院農学研究科 地域環境
科学専攻

〒606-8502

京都府京都市左京区北白川追分町

TEL : 075-753-6060

FAX : 075-753-2266

E-mail : yuuko * kais. kyoto-u. ac. jp

日本線虫学会ニュース第70号

ニュース編集小委員会

竹内 祐子（京都大学）

村田 岳（農研機構）

学会全般に関するお問い合わせ先：

日本線虫学会事務局

〒305-8666

茨城県つくば市観音台 2-1-18

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合
研究機構 中央農業研究センター内

E-mail: shomu * senghug.org

URL: <http://senchug.org/>